

## 二十三、国の鎮め

「戦々兢々として己を省み、しかも大胆に念仏する。これ念仏行者の本領である。」  
真実の安心はそこにある。

仏の本願を信ずることは不徹底にして、しかも生活は己を省ることなく大胆である時、悪事よりよりに出来して、やがて念仏どころか、身の行きつまりが訪れるであろう、そこには真の安心はない。

五年十年が間、ともに仏道を学ぶに、なかなか安心のならぬ人があり、どこへ出してもこの人なら心配なしと安心のできる人物あり、安心のできる人物になりて、まず一人前である。それ以上はその人の精進による。親の安心する子、子の安心する親、夫の安心する妻、妻の安心する夫、師の安心する弟子、弟子の安心する師、等々すべてこれ道の人である。

風がちよつと吹けば心配になる家、水がちよつと出れば心配になる橋、ちよつと波が高ければ心配になる船、旅に出せば心配な子ども、眼のとどかぬ所に置けばすぐ何かコソコソ悪いことを働く心配な人物、そのままではついにこの人を重く用ゆる社会なく、この人もまたついに大成することはできない。

腹が立てば、必ず相手をやっつける。気に食わぬことがあれば、相手をぶった斬る。こうした人物は安心ができない。だれも恐れてこの人に心の帯をとかない。やがて多くの人に糞よけによけられる。敬遠されることは、さびしいことである。こうした人は不安心の種を自ら播いておいて、安心の種を人に求める。

思うようにならねば、徒党を結んで要路の大官を虐殺する。もちろんそこには、彼らをしてかくあらしめた社会状態のあることを考えなくてはならないが、さりとて、必ず剣をぬき、銃を持って立つといった短気なやり方がいいだろうか。硬直した正義、剛直な人物、必ず己を省るところなく、他の上のみ悪事を見る。不安心の因をかえつて大きくする。安心のならぬ国民性である。

英国あたりでは、皇族のお方でも、平気で街を散歩なさつてもなんらの危険はないと聞く。それに日本の状態はどうであろう。

世界大戦の始まる前、英国の労働党の党首はたった一人非戦論を唱えたが、殺されはしなかつたのみならず、彼はやがて内閣総理大臣となった。

米国などでも言論は自由であり、新聞記者などは、大統領のことなどどんなに悪口雑言してもかまわぬ。しかしどの大統領も虐殺されたりしない。日本では総理大臣になるとは殺されることである。宮様が動かれる、大官が来る、警官の垣をつくる。それでも危い。困った安心のならぬ国民である。

仏教では「柔和忍辱」「身意柔軟」であることが、その行者の正しい生活そのものとされる、身も意もやわらかで強いことである。仏の光明にふれたもの、仏の教えの生きたものは、自然に柔軟となる。これ仏教の一大眼目である。柔軟な人の前にだけ安心がある。力強さがある。

角の直くて、毛の長い瘦せた牛が、人さえ見ればつきかかる。安心のなつたものではない。角が美しくして弧状を呈して、よく太つたゆつたりとした牡牛が、のそのそと歩んでいる。何だか力強く感ずる。柔軟であることは強いことである。

参禅したという人が、剣をぬいて人を斬殺した。その人に教えを説いた僧侶が弁護に立つ。その僧侶がもし真の仏教者であるならば、何ゆえに破門の宣告をしないのか。教えを聞いた者が早まったことをしたことに對して罪を荷負つて謹慎懺悔しないのか。

禅定の剣は、衆生の悪業流転の本源を斬るべく、けつしてどこかの管長のごとく自らの肉体の腹を斬るべからず、他人の肉体を斬るべからず。大乘禅にあらず、魔道である。外道である。参禅は、柔和忍辱の成就にあり、和の成就にあり、銜氣の養成にあらず、道の成就にあり、剛直の養成にあらず。

仏陀は、群生の罪惡を荷負つて、悲痛大悲し、正覺の光輝をいよいよ輝かせども、人を斬りたまわず。暴力をもつて世を動かさんとするの徒輩、大乘劍の小乗軍のといえども、みなこれ儒教を根底とする邪道にほかならず。

叛徒おこり、幾千の徒、まさに銃火に訴え、流血の慘を見んとす。思慮苦心、ついに街に兵火なく、最後の手段をとらずして、事を平和に解決せし將軍の腸、大乘的と2言うべし。

元寇の時、執権北條時宗、祖元禪師に聞く、よせくる大軍をいかにするぞ。大喝一声「莫妄想」。時宗、元の使を斬らしむ。後、日蓮上人「なぜ罪無き元の使を斬つたか。可愛想なことをした。」と言つたと聞く。仏の人、さもありぬべきことである。日本勝たざるべからず。一人も無益に殺すべからず。

市井の巷、兄貴と兄貴、ちよつとした口論から刃物三昧に及ぶ。無教養のしからしむるところである。教えなければ、人は禽獸よりも恐るべし。命の軽きこと塵芥のごとし。世にはわが子を殺して、その上保険金詐欺を計画した夫婦あり。心力のなき証拠である。弱いにも程がある。

村会議員に当選して嬉しさのあまり逆上して、刃物を持って親類に出かけ、皆殺しにし、自分も死んでしまった男、ポーナスが思つたよりも多かつたので、腹を切ろうとした人間、女が言うことを聞かんとて無理心中をする男たち、いやはや安心のならぬことではある。冷水三斗、民族の頭上に、大法の清浄劍を下さぬかぎり、いつまでも困つたことであろう。時の大官を戒嚴令下で十重二十重に守つても、そこに安心があるうか。劍のむきが変わつたらどうする。事は、教育の問題に属する。日本教育への抗議がなされぬかぎり、問題の始末がつかぬ。

日本の不安心は、日本のインテリの「迷信性」とともに増してゆく。

浄土真宗の行者、一文不知の老婆が如来本願力に乗托して、一切の苦悩を超克して、迷わず、祈らず、純粹絶対の道義を顕現して譲らぬ時、官製の学士たち、迷信の群に跳る。亡国の相、ここにあり、国家不安心の根源ここにあり。

宗教的教育を無視せる、明治以来七十年の教育は、今清算されて可なり。

大本教が亡ぼされた。しかし出口王仁三郎、元伊太利国顧問、下位春吉、海軍大佐某の大講演が一緒に広島でなされたのは、たった昨年のことである。何が何やらわからぬのが、日本インテリの動きである。

猫を見る。自分の思う所にしか動かぬ。子どもを見る。自分の思うとおりにしか動かぬ。しかも火鉢の火を握ろうとする。一寸の虫にも五分の魂、生き物は必ず、自分の思うとおりにしか動かぬ。そのとおりにさせる自由主義の行きづまりがそこにある。だからと言って、これを型や規則で弾圧する。形は動いても魂は反逆していること、やかましく無智にして無慈悲な親爺の大言怒号では、家庭内は治まらぬと同一である。けつして安心はならぬ。

人間にだけ教育がある。

最高真実の教えによつて、自らの思いのままに生きても、如来の本願真実に相應し、道を生き得るを、親鸞聖人は「自然法爾」と言われた。あるいは、獲得名号と言われた。如来心が、衆生心に生ききつたことである。

手ばなしで生きさせても、安心して理想の彼岸に歩み込むことを往生といい、その道は白道といい、大乘といい、一仏乗といい、本願一実の大道といい、易行道といい、念仏といい、信心といわれるのである。行者は、安心を頂くという。

自ら安心なものは、人が見ても安心である。その安心こそ、道の最初であり最後である。「どうも安心が得られませぬ」という。得られぬはずだ、道を外れているがゆえに。国家不安心なれば、国家道を外れているのである。

頭の下がらぬ人、頭を如来の前に、善知識の前に下げきらぬ人は、安心のならぬ人である。

これに二つの種類がある。一はいわゆる、ハムレット型であり、一はいわゆる、ドンキホーテ型である。

前者は、病名を付ければ「我慢、小心、神経過敏、精神幽霊、潔癖、柔弱、腹立、反逆症」であり、後者は「誇大妄想、良心麻痺、一事不相続、軽率、二重人格、無智性、健忘症」である。

前者は、いかに表面おとなしく見せかけても、腹に一物あり、反逆すれども決断なし。だれとも一つになれず、怏々おっおっとして楽しまずして一生を送る。後者は、涙一升働いて感謝するも一時のことなり、悪事を行じ辛うじてその場をぬければ、喉もとすぎて熱さを忘れ、責任を感じず、洞察力なく、節操なきをその症状とする。両者ともに安心のならぬ存在である。

六字の太行が、腹の底を貫ききらぬかぎり安心のできる人にはならぬ。困ったことには、教えの前に頭を下げきらぬ。

この世はもとより、不安心な世界である。であるからもし安心を世の中へ求めかぎり、外へ求めるかぎり、ついに得られないであろう。ゆえに外に求める者は一生ついに不安心のままでおわる。貪欲は外に求め、信心は内に自らをたのみ、自らに求める。

今宵も大風、高い波の音とともに日本海は狂いに狂っている。

いかに波は荒れても、大海自体には何の変わりもない。

あの波の底の大海水を憶う。

人生の表面に荒れ狂う現象の波は荒い。

しかし信心は寂静の樂に通う心であり、

念仏は寂光浄土に通う道路である。

ゆえに、念仏の心は内へ内へと寂滅して、

煩惱の雑音を越えて、純粹なる彼岸の声を聞く。

この彼岸の招喚は一筋である。

したがってこの招喚の声に生かされる者も一心であり、一筋である。

この人のみ、よく一切の騒々しい雑音を超越する。

人生を超越するもののみ、よく安心を得る。

浄土を寂静無為の樂という。

一切の騒々しさを越えた世界、絶対静かな世界ということである。

しかし無内容な世界ということではない。

真空妙有とて、限りなき徳に莊嚴された世界である。

であるから浄土からの一切のおとずれは、この世界の騒々しさを滅して、

それを通して、仏徳の広大さを人生に実現されるのである。

かくて南無阿弥陀仏は、真実の「国の鎮め」であり、「世の鎮め」であり、「家の鎮め」であり、「人の鎮め」である。

親鸞聖人は、念仏をもつて、鎮護国家の法とせられた。国の鎮護は、念仏である。――私は、今このことについて詳しく書くことはできない。現世利益和讃、金光明經の真意であるが――人格のしずめは、人格の内面にあり、国土の鎮めは国土の内面になくてはならぬ。念仏は、この内面に成就された、一切の鎮めである。

南無阿弥陀仏の内にもみ寂靜があり、大和があり、千万斤の重みがあり、やがて安心がある。

汝の生存が、静かな処を騒々しくする存在か、

汝の行歩の一步々々が、騒々しい世界を静かに鎮める存在か、

上に太つて底に根の延び方が悪かった大木は倒れる。

静かに内に培う者は、人の世のしずめである。  
碇いかりのない船は流れる。

内に真に充実して、波に動かぬものは、社会のしずめである。

大いなる山に非常時なし。

外なる非常時に処して、静かに動かず、平常のごとく事に随い、全身を捧げて現実に生ききる念仏の子は、国家社会の根幹である。

汝の生存をして、世の鎮めたらしめよ。